

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト，その4－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 栗 博志・高田 昌実・萩原 隆二
田島 紘己
鹿児島大学 名誉教授 納 光弘
加治木温泉病院 夏越 祥次
県立大島病院 栗 隆志

[第六章：油絵「リストの思い出」とロマン派の人々]

ロマン派の時代は、文学、音楽、絵画などが渾然一体となり、芸術が発展した時代である。

図29の油絵は、ピアノ製作者コンラッド・グラーフの依頼により、1840年にダンハウザーが描いた「リストの思い出」と題されたものである。

ここには、リストが交流した人物のごく一部が描かれているにすぎないが、当時のサロン様子を窺い知る事ができる。

グラーフ・ピアノに向かっているのがリストで、その足元に座っているのが、マリー・ダグー。前列のイスに腰掛け、左手にタバコを持っているのが、ジョルジュ・サンド、その左が、作家アレキサンドル・デュマ(父)で



図29 「リストの思い出」

ダンハウザーの油絵 (1840)。

ピアノに向かうリスト、足元のマリー・ダグー、前列のジョルジュ・サンドとアレキサンドル・デュマ(父)。後列はロッシェニ、パガニーニ、ヴィクトル・ユーゴー。壁にバイロンの肖像画、ピアノの上にベートーヴェンの胸像。

(Burger: F. Liszt. Princeton Univ. Press, 1989.)

ある。

後列は右から、美食家で知られるロッシェニ、バイオリニストのパガニーニ、そしてヴィクトル・ユーゴーである。

ロッシェニの後方の壁には、バイロンの肖像画が掛けられている。

ピアノの上には、アントン・ディートリヒによるベートーヴェンの胸像が置かれている。この絵の作者ダンハウザーは、ベートーヴェンの死に際し、ベートーヴェンのデス・マスクを作ったが、後年、それをリストに贈った。

[1] 日本のロマン主義

夏目漱石は、「浪漫」という字を当てたがよく風潮をとらえていると思う。

我国では遅ればせながら、森鷗外、島崎藤村、与謝野晶子、高山樗牛、土井晚翠……など、多くの人が西欧の影響を受けた。

これらの人は、ある意味、日本語の専門家であったが、外国語もよく勉強し、西欧のロマン派の空気を吸った。

鷗外は、1882年にドイツに留学、87年には、ベルリンでコッホや北里柴三郎にもあっている。漱石は、1900年にロンドンに留学。同年に留学予定の樗牛（晚翠と同級生）は、結核を発症し断念。その後すぐに31歳で没した。晚翠は、01年にロンドン大学、その後、ソルボンヌ、ライプツヒ大学などで文学を学んだ。12年に晶子はパリ～ヨーロッパを、13年より藤村は、パリ、ロンドンを訪れた。

鷗外は「舞姫」を書き、ロマン派の魁となり、晶子は、西村伊作、鉄幹らと共に文化学院を創立し、男女平等教育を基に、西洋的な自由教育を実践し、女性解放思想家として活躍した。04年には「君死にたまふことなかれ」を発表。桜島には「わが胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすし桜島山」の碑がある。

晚翠は「荒城の月」「星落秋風五丈原」、詩



図30 青木繁「わだつみのいるこの宮, 1907」
海底の海神、綿津海宮殿の柱樹に坐る山幸彦と赤い衣服の豊玉姫。部分、下部割愛。
(ARTIZON MUSEUM蔵, H.P.)



図31 シェイクスピア「ハムレット」のオフィーリア, 1851～52年
精神世界、幻想と光に満ちた装飾美。ラファエロ前派ミレイの傑作。
(世界の美術館, テイトギャラリー, 講談社, 2009)

集「天地有情」などの名文を遺したが、バイロンの「チャイルド・ハロルドの巡礼」や「ホメロス」なども翻訳した。

音楽では、「荒城の月」の作曲を行った瀧廉太郎は、02年に、メンデルスゾーン設立のライプツヒ音楽院に入学した。彼は、24歳

で結核で死亡した（ちなみに瀧の入学した小学校は、私の卒業した小学校で、彼の墓は、私の生まれ育った家から、徒歩数分の所にある）。

絵画では青木繁に代表されよう。東京美術学校で、黒田清輝の指導を受け、モローやラファエロ前派の影響を受け、古事記を愛読した彼の「わだつみのいろこの宮、1907」（図30）は、画題、構図、装飾性など総合的に判断して、日本ロマン派絵画の最高傑作であろう。

彼は、革新的作品を遺しながら、広く知られる事なく、放浪のはてに28歳で夭折した。どこか、バイロンに通ずる所がある。図31のラファエロ前派の絵を参照。

[2] バイロンとイギリス・ロマン主義

バイロン（図32）は、ブレイク、コールリッジそして湖水地方を愛し、自然讃美のワーズワースらと共に、イギリスを代表するロマン派の詩人である。

特にワーズワースは、高校時に覚えた詩、「虹」などで日本人に親しまれている。

The Rainbow

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky

.....

The Child is father of the Man
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety

バイロン（1788-1824）は、10歳で家督を継ぎ男爵となり、1809-11年には、ギリシャなどを旅した。

上院議員となった彼が、1811年、ラッドイト運動（産業革命で失職をおそれた手工業者などによる、機械打ちこわし運動）で、「機械を破壊した者は死刑」という英政府の法案に反対の演説を行った事は、よく知られている。流動的な時代であった。



図32 アルバニアの民族衣装のバイロン
ギリシャ独立戦争に参加し死亡。ペリオーズは、交響曲「イタリアのハロルド」、カンタータ「ギリシャ革命」を作曲。

(Wikipedia)

旅の経験をもとに、1812年、哀愁と異国情緒たっぷりの「チャイルド・ハロルドの巡礼、第1, 2巻」を出版し、一躍、時代の寵児となった（後に、第3, 4巻を出版）。

中学生の時に覚えた英語の重要構文である「I awoke one morning to find myself famous (Byron)」は、この時の事である。

彼は、この他に「タッソー」「マゼッパ」など多くの作品で、ロマン派の人々にインスピレーションを与えた。

ゲーテは「今世紀最大の天才」と称えた。

土井晩翠の訳は透逸である（昭和24年、新月社）。

「あゝ君！むかしギリイスに天の素生と崇められ、詩人の意より造られし若しくは譬へ説かれしミューズ！.....」。この作品は極めて長文。

バイロンは、1823年、オスマン・トルコの圧政に対する古代の栄光の小国家ギリシャの独立戦争に身を投じ、レパント要塞の攻撃を



図33 ドラクローア「キオス島の虐殺, 1824」
ドラクローアは、バイロンに影響を受け、この絵を描く。
これは、ギリシャ独立への世論を呼び起こした。
(ルーブル美術館蔵, 西洋音楽史体系5, K.K.学習研究社, 1998)



図34 ロンドンでのパガニーニ
左は、ダブル・バス（コントラバス）の名手、ドラゴ
ネッティ（ドラゴネッティ弓で名を残す）。
(R. Hamerton画, Sugden: Paganini. Omnibus Press, 1980)

計画中に、ミソロンギでマラリア熱により、
36歳で死亡した。

ヘミングウェイの「誰がために鐘は鳴る」
のロベルトの心境だったのかもしれない（クー
パーとバーグマンの映画は、1943年）。

フランス・ロマン派絵画最大の巨匠ドラク
ローは、1824年、ギリシャのキオス島での独
立運動鎮圧の為、一般島民を大虐殺するトル
コ軍を描いた。「キオス島の虐殺」（図33）で
ある。

死んだ母親にすがりつく幼い子供（画面右
下）など、リアルな描写が迫る。この絵など
の影響で、ヨーロッパの世論がまきおこり、
ギリシャは、1836年に独立を獲得した。

1825年、ベルリオーズは、カンタータ「ギ
リシャ革命」を作曲した。

[3] パガニーニ

イタリア人のヴァイオリニスト、パガニー
ニ（1782-1840）は、1828-34年、全ヨーロッ

パの演奏旅行を行い、その超絶技巧で一大セ
ンセーションを起こした。ショパンは、29年
にワルシャワで彼の演奏を聴いた。

その音楽性と技巧は、当時の音楽家に衝撃
を与え、ヴァイオリンやピアノ演奏法に革命
をもたらした（図34）。

彼のパリ・デビューは、1831年で、代表作
「24の奇想曲、カプリース」の出版は、1820年
である。

リストは、32年にパリで彼の演奏に接し、
四本の弦に秘められた音楽表現の可能性に啓
発を受け「ピアノのパガニーニ」になる事を
決心し、精進した。

パガニーニは、この絵の描かれた1840年に
没したが、リストはガゼット・ミュージカル
に追悼文「パガニーニ、彼の死に際して」を
寄稿し、「巨匠的名技手技は手段であって、
目的とならないよう希望する」と述べている。

ショパンは、魅力的なバルカローレの小品
「パガニーニの思い出」、リストは「パガニー

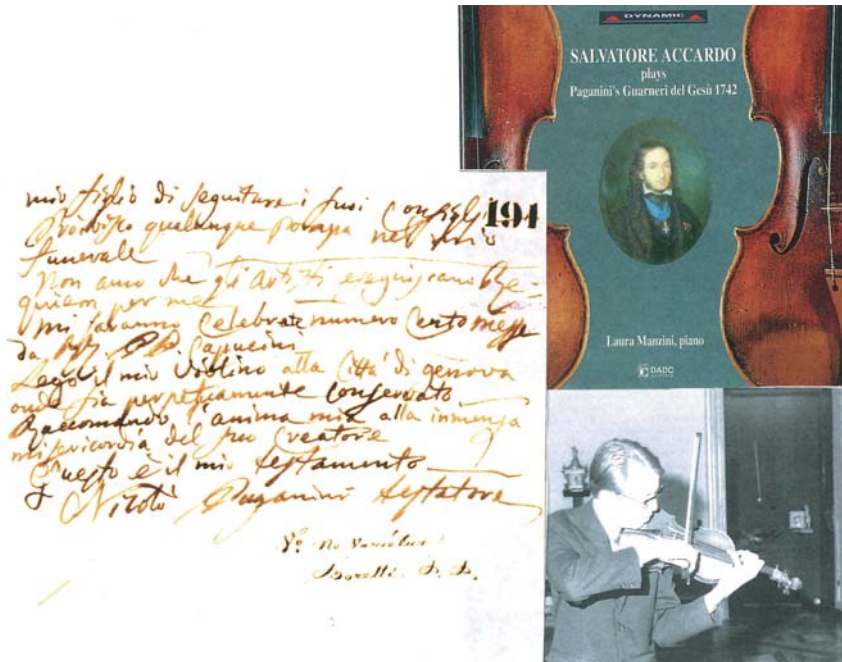


図35 アッカルドによる「カノン」演奏のCD
 左は、「ジェノバ市に寄贈する」等が書かれた遺言状（1837）。
 右下は「カノン」を弾くクレメール（1969）。
 (CD, DYNAMIC, © 1995)

二による大練習曲」（第3番は「鐘」），シューマンは「パガニーニの奇想曲による6曲の練習曲」「パガニーニの奇想曲による6曲の演奏会用練習曲」，ブラームスは「パガニーニの主題による変奏曲」，ラフマニノフは「パガニーニの主題による狂詩曲」……などを作曲した。

パガニーニのヴァイオリンは，1742年製のグアルネリ・デル・ジェス，通称「cannone，カノーネ，カノン」と呼ばれる。「大砲」の名の由来は，この楽器の音が大きく，よく響いたからである（図35）。

彼の遺言により，この名器はジェノバ市に寄贈され，劣化予防の為，2年に一度，演奏されている。

その音は，100頁に及ぶ資料と共に，アッカルド（1957年にも，カノーネを演奏した）

のCDで聴く事ができる。

シュポーアもグアルネリを使用していた。

自身がヴァイオリン奏者でもあった，ウィーン在住のロシア大使ラズモフスキー伯爵は，若きベートーヴェンの才能を見抜き，3曲の通称「ラズモフスキー四重奏曲」を依頼し，彼に弦楽四重奏曲用の楽器，1セットを贈った（弦楽三重奏曲を献呈されたりスモフスキー侯爵とも言われる）。

即ち，1718年のグアルネリ，1667年のアマティ，1670年のルジェーリのヴィオラ，ジョゼッペ・グアルネリのチェロである。

これらの楽器は，当時から貴重であった。

さて，マルファン症候群は，全身の結合組織に異常が生ずる。

その顔貌の特徴は，眼間解離，小顎，顎後退，頬骨低形成，眼瞼裂斜下（垂れ目）であ

り、また骨格は、高身長、細く長い指、胸郭の変形（漏斗胸）、脊椎の後・側弯、皮下脂肪の減少などが挙げられる。

パガニーニは、本症であったと言われ、容姿はそれを示唆している（図34）。

彼は、その疾患に悩まされたに違いない。伝記作家のショットキーは、その特徴的な身体・動作に言及している。

然し、彼はそのハンディキャップを克服し、音楽史上、大偉業を成し遂げたのである。

症候群の指が長く、左手のリーチが長い事は、ビオラの演奏に適している。

パガニーニは、1731年製のストラディヴァーリのビオラを購入し、ベルリオーズに名人芸を発揮できるビオラ曲の作曲を依頼した。

ベルリオーズは、バイロンの「チャイルド・ハロルドの巡礼」に題を採り、ビオラ独奏付き交響曲「イタリアのハロルド、1834」を作曲したが、パガニーニは、ビオラ・パートに満足しなかった（リストは、37年に、この交響曲をピアノ編曲した）。

然し、38年にこの曲の演奏を初めて聴いたパガニーニは感激し、その2日後にベルリオーズを「ベートーヴェンの後継者」と称え、オペラの不人気などで生活に困っていたベルリオーズに、2万フランの大金を贈った。

返礼にベルリオーズは、シェークスピアに想を得て作曲した大作、合唱付き劇的交響曲「ロメオとジュリエット、1839」をパガニーニに献呈した。

後年、金銭的に余裕ができたパガニーニは、「Delfino」「Kreisler」「Hellier」の3挺のストラディヴァーリウスを所持した。

蛇足ながら、ストラディヴァーリは、伊語（独語）、ストラディヴァーリウスは、ラテン語（英、仏語）。略す時は「Strad.」とする（例、Strad. viola）。

絶対的ではないが、通常、前者は人名、後者は楽器に使用する。

パガニーニは、演奏中、一本の弦で演奏したり、サングラスをかけたり、楽器で動物の声をまねたりと、エンターテイナーでもあったが、当時の人は、悪魔に魂を売って超絶技巧を手にしたと本気で信じ、1840年に、ニースで死亡した時には、司教は神聖な地に彼を埋葬する事を禁じた。遺体は改葬をくり返し、パルマの共同墓地に埋葬されたのは、1876年の事である。

[4] ジョルジュ・サンド

ショパン（1810-1847）は、1831年、ウィーンからパリに向かう途中で、ロシア軍によるワルシャワ陥落を知る。同年、パリに到着。当初は高名なピアニスト、カルクブレンナーに師事しようとしたが断念した。

パリで親交を結んだのは、いづれもピアノの名手であるリスト、フンメルに師事したヒラー、その友人のメンデルスゾーンである。

32年、最初の演奏会がピアノ製作者カミュー・プレイエルのサロン・プレイエルで、ショパンを応援するリストやメンデルスゾーンを招待して開かれた。

演奏曲は、ショパンのピアノ協奏曲第2番



図36 ドラクロワ画「サンドとショパン、1838」
1836年、リストの紹介でドラクロワはショパンと出会う。

（音楽の手帖、ショパン、青土社、1980）

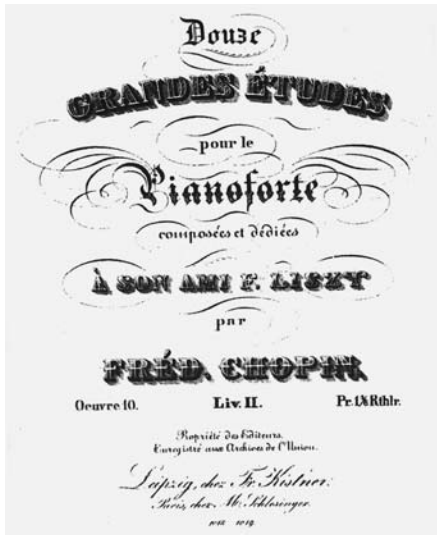


図37 ショパンの練習曲、作品10、1833
「我が友リストの為に作曲、献呈されたピアノ・フォルテの為に12の大練習曲、作品10」
(作品10、初版のタイトル・ページ)

(1829年作曲、後年ポツカ伯爵夫人に献呈・出版)や、ショパン、カルクブレンナー、ヒラーらが6台のピアノで演奏するカルクブレンナーの「序曲と行進曲付き大ポロネーズ」などであった。当時、リサイタル形式はなく、何人かの演奏家達が、工夫・協力しあって、演奏会を開いていた。独奏者によるリサイタルは、1840年にリストが創始した。

1832年、パリは革命の余波の暴動とコレラに明け暮れ、人々は不安に陥っていた。

コレラは1817年にインドで発生して以来、現在までに7回のパンデミックが記録されている。インドでは、最初の発生から100年間に4,000万人位が死亡したと言われる。

2回目は、パリでは32年に起こり、当時の首相も死亡した。

原因は、18世紀中期から19世紀の産業革命による、農村から都市への人の移動、人および物流の世界規模の移動によるもので、現在のコロナ禍と全く同じ状況であった。

不衛生都市パリの上下水道などの大改造は、これらが誘因となり、後年、ナポレオン3世により断行された。

32年、ショパンは、ラジヴィーウ公爵の紹介で出席した、ロスチャイルド男爵家のサロンで人気を得、更にリストとの共演などで有名となり、大勢の弟子（貴族やブルジョワの婦女子）を得て、金銭的にも安定した。

この頃、ポツカ伯爵婦人と出会っている。

ショパンは、シューベルト シューマン ブラームスらの内向的ロマン主義で、リスト ヴァーグナー プルックナー マラー、R. シュトラウスは、外向的ロマン主義である。

リストは、ショパンの詩的感情表現を絶賛した。ショパンは、リストの演奏に賛辞はあなかったが、シューマン同様、作品は受け入れなかった。プライドもあったのだろう。

ショパンの最も重要な曲の1つ「12の練習曲、作品10、1833」は、リストに献呈された。

図37に示すように、楽譜には「フレッド・ショパンにより、我が友リストの為に作曲され、献呈されたピアノ・フォルテのための、12の大練習曲、作品10」と記されている。

それに続く「12の練習曲、作品25」は、1837年に、マリー・ダグーに献呈された。

ショパンは、ピアノ協奏曲第1番をカルクブレンナーに、24の前奏曲をブレイエルに、バラード第2番をシューマンに、ピアノ・ソナタ第1番をエルスナーに献呈した他は、大部分を貴族やブルジョワの婦女子に献呈している。

(つづく)